NHK スペシャル『ワーキングプア』取材班編『**ワーキングプア　解決への道**』ポプラ社、2008 年
II ワーキングプア先進国～アメリカ／文庫版 098-109 頁

今の日本にとってヒントとなり得る対策はないか――全米各地で行われるさまざまな取り組みについての資料を読み漁っていた私たちが、とくに注目したのが、南部・ノースカロライナ州で始まっていた動きだ。

これまで日本で私たちが見つめてきたワーキングプア問題の背景には、「地域の衰退」があった。地方の産業が衰退し、仕事の絶対量が減り続ける中で、多くの労働者が正規の職を失い、ワーキングプアに転落していた。

これに対し、ノースカロライナ州では、州政府が自らイニシアチブをとって、「グローバル化の影響を受けづらい」新しい産業の誘致・育成を図る一方で、地域のワーキングプアの人たちを再教育し、新産業への就職を促しているのだという。

どうすれば、地方の一自治体にそんな大がかりな対策がとれるものなのだろうか――私たちは、問題解決へのヒントを探るため、このノースカロライナ州の取り組みを取材することにした。

ノースカロライナの空港に降り立ったときの最初の印象は、「なにもない！」だ。

3 階以上の高さを持つビルなど、ほとんど目にすることがなく、高速道路を車で走ってみても、目にするのは、行けども 行けども広がる広大な林だけだ。

「こんなに何もないところで、本当に先進的な取り組みが行われているのだろうか？」。頭の中に不安がよぎるほどだ。

ノースカロライナ州では、かつて、豊富な木材を使った家具の製造が盛んに行われていた。しかしこの産業は、1990 年代後半、中国との苛烈な価格競争にさらされ、急速な衰退を始める。街のあちこちには、人気のない巨大な家具工場が、今も数多く残されている。中国との争いに敗れた工場が次々と閉鎖し、ひどい時には一度に 5000 人もの労働者が一斉に解雇され、多くの人たちがワーキングプアに転落することとなった。

衰退を続けていたこの地域に、最近、真新しい看板が目立つようになった。いずれもバイオテクノロジー関連の企業だ。ここ数年、州政府が、研究施設の貸し出しや税金の優遇策などによって、積極的な誘致を進めた結果、現在 400 社のバイオ企業がノースカロライナ州に拠点を置くに至っている。

「地域で働く人材は、地元から育てたい」――州政府は三年前〔2005 年〕、130 億円の予算 を投じて、バイオテクノロジーの企業で働く人材を育てるための、新たな教育プログラム を開始した。対象となったのは、低賃金の職場で働く、ワーキングプアの人たち だ。州内 26 カ所にある、州立のコミュニティーカレッジ（短期大学）で、現在、5000 人の受講者 が、バイオ産業への再就職を目指して勉強を続けている。

会場となっている短期大学の一つ、フォーサイス・テック [1]を訪ねてみた。1974 年に設立され、毎年 1 万人近くの学生が学んでいる。学生の多くは、高校を卒業してすぐにフォーサイス・テックに入学した 10 代の若者たち。一見すると、日本の短大と大きな違いはない。

しかし、バイオテクノロジー教育のフロアに足を踏み入れると、その雰囲気は一変する。年齢層が急に跳ね上がるのだ。白衣に身を包み、実験室で顕微鏡をのぞき込む学生たちは、白人、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニックと、人種は実に様々。しかし共通して言えるのは、みな年齢層が 30 代後半以上で、ピザの配達や倉庫でのフォークリフトの取り扱いなど、労働環境が厳しく賃金の安い仕事についていることだ。

[1] Forsyth Technical Community College

プログラムで教えるのは、バイオテクノロジー産業で働くのに必要不可欠な、実験器具の扱い方や、細胞培養の方法など、実践的な知識だ。高校卒業程度の学力があれば、誰でも入学することができる。
受講生たちは、ここで、バイオ業界で求められる基本的なノウハウを身に付け、研究を補助する仕事への再就職を目指している。通常の大学なら年間で数百万円かかる受講料が、州政府の補助によって15万円ほどしかかからない。

フォーサイス・テックで、2年前からプログラムに参加している女性に出会った。小柄で、笑顔がとてもチャーミングなこの女性は、クリスティン・プルエットさん、37歳。3年前に夫と離婚し、二人の息子を育てている。
現在クリスティンさんが受講しているのは、「DNA 学」の講座だ。授業を聴講させてもらったが、正直言って、その内容はあまりに高度で、まったくついていくことができない。実はクリスティンさん自身も、高校を卒業してから、学問とは無縁の生活を送ってきた。しかし、中学の理科の復習から初めて、今では遺伝子のクローンを作る実験ができるまでに、バイオテクノロジーに関する知識が深まった。
授業を終え、帰り支度をするクリスティンさんに話を聞いてみた。
「今日は、新製品を開発するために、遺伝子を組み替える方法を勉強したんです。授業は、とてもおもしろいですが、たまにちんぷんかんぷんな時もあります」
新しいことに挑戦できる喜びにあふれている印象を受けた。

ノースカロライナ州で、ワーキングプアのための再教育プログラムが始まったきっかけは、2004年に州政府がまとめた報告書だった。
基幹産業だった家具の製造業が衰退し、州経済が右肩下がりで落ちていく中、どのような産業ならば、グローバル化の影響を受けずに、地元の人たちを安定して雇用できるのか？　報告書の作成のため、州全域から、経済学者や企業経営者などが集められ、徹底的な検討が行われた。そしてこのとき注目されたのが、安全性を確保するために国による厳しい基準がある、バイオテクノロジー産業だった。
「バイオ製品は、アメリカの安全基準に合格しないと、国内では販売できません。そのためには、非常に高い技術力が必要です。ですから、この産業が簡単に海外に流出することはないだろうと考えたわけです。」
人材育成プログラムの広報・推進に携わってきた、州政府の担当官、ノーマン・スミットさんは言う。
事実、前出の、CSRと呼ばれる民主党系シンクタンクの試算でも、海外に流出したと見られる職の数は、IT関連の20万に対し、バイオ関連は5千と、きわめて低いレベルに抑えられている。
経済のグローバル化そのものに抗えないのであれば、その中でなんとか生き残る術を見つけるしかない――こうしたきわめて現実的な考え方に則って、ノースカロライナ州の取り組みは、幕を切ったのだった。

プログラムに参加し、バイオ業界への就職を目指す、クリスティン・プルエットさん。ノースカロライナ州で生まれ育ち、親も子どももいる地元で働き続けたいと、強く願っている。
昼過ぎ、学校での授業を終えた後、クリスティンさんが向かうのは、町外れにある小さなレストランだ。クリスティンさんはここでウェイトレスとして働いている。給料は、ひと月13万円。健康保険もないこの仕事で、勉強を続けるあいだの生活費を、必死になって稼ぎ出している。
仕事が終わるのは、あたりが真っ暗になった夜10時だ。大雨が降りしきる中、クリスティンさんが向かったのは両親の家。預かってもらっていた二人の息子を引き取りに来たのだ。両親の協力を得て、なんとか仕事と勉強を両立させている。
息子たちは6歳と4歳。両親のベッドで、すでにぐっすりと寝入っている。クリスティンさんは足

音を立てないよう部屋に入り、子どもをそっと抱きかかえて、車へと運んで行く。
　まだまだ甘えたい盛りの息子たち。しかし、一緒に過ごす時間はほとんどない。
　家に帰りつき、子どもたちをベッドへと運ぶと、クリスティンさんは机に向かった。授業の内容が高度になるにつれ、日々の予習・復讐が欠かせなくなっている。勉強は、時に深夜 2 時まで続けられることもあるという。
「どうして、そこまで頑張れるのですか？」という私たちの問に、クリスティンさんははっきりとこう答えてくれた。
「もっとゆっくり、子どもと過ごす生活がしたいです。自由な時間がもう少しあったらいいなと……。今は、週末も仕事をしています。でも本当は、土曜日に子供たちを動物園に連れて行ったり、色々なことをしてあげたいんです。そのためなら、頑張れます」

　プログラムの受講生のほとんどが、明るい未来を手に入れるために、血のにじむような努力をしながら、仕事と勉強を両立させている。これに対し、学校側も、受講生たちの就職を確実にするための、あらゆる支援を惜しまない。
　授業を教える教師たちはすべて、実際にバイオ業界で長く働いた経験を持つ、この道のプロフェッショナルだ。彼らは、業界へのコネクションと自らの体験を元に、企業に入ってすぐに役立つ、生きた技術を学ばせている。
　卒業を控えたクリスティンさんが受講する「DNA 学」の授業。この日、教師のアラン・ビアードさんが、受講生たちに新しい実験器具を紹介した。
「これは、塩基の配列を自動で読み取る、とてもハイテクな機械なんですよ」
　この年、プログラムに導入された最新鋭の DNA 解析機。価格はなんと、1 千万円だ。地元の大手バイオ企業が続々と導入を決めていると聞きつけ、州の予算で購入した。受講生たちに使い方を学ばせておけば、就職の際に有利になると考えたからだ。

　アランさんは、プログラムの教師として採用される前は、長年製薬会社で研究開発に携わってきた。当時の人脈を活かして、今も業界関係者との情報交換を欠かさない。地元企業が、DNA 解析機を使える人材を求めているという情報も、独自の人脈によって得たものだ。
「受講生がどんなに一生懸命勉強しても、それが実際の現場で役に立つ知識でなければ、意味がありません。ですから私たちは常に、今、業界でどんな知識と技能を持った人材が求められているかをリサーチして、授業内容に反映させています。学期の途中でカリキュラムの内容変更をすることなども、しょっちゅうですよ」

　地元のバイオ企業も、プログラムの卒業生を積極的に採用している。去年、卒業生 3 人を採用したという EN-CAS[2]社という企業を訪ねた。この企業が行っているのは、残留農薬の検査業務だ。大小さまざまのフラスコや、値の張りそうな大きな機械が並ぶ部屋の中で、研究員たちが忙しそうに手を動かしていた。
　去年入社したプログラムの卒業生は、いずれも 40 代の男女 3 人。閉鎖した家具工場の元職人や、時給 700 円ほどしかない事務の仕事を 10 年以上続けていた女性など、これまでの経歴はさまざまだ。しかし共通して言えるのは、ノースカロライナに長年暮らし、地元を離れたくないという強い願望を持っていること。実は、卒業生たちのこうした特性こそが、企業にとっては強い魅力なのだという。
　経営者のティム・バラードさんは、次のように話す。
「四年制の大学を卒業した人であっても、うちの会社の仕事に慣れてもらうためには、だいたい 2 年くらいの時間がかかってしまうんです。しかし、いずれ会社を去るかもしれない人材に、高い教育コストをかけても意味がありません。その点で、長く勤めてくれるプログラムの卒業生のほうが、我々の初

[2] EN-CAS Analytical Laboratories. / 2359 Farrington Point Drive, Winston-Salem, NC 27107.

期投資に対する、利益が高いと感じています」

むろん、卒業生の受け入れ先となっている企業のほとんどでは、大学の修士号や博士号を取得した、レベルの高い研究員の採用も同時に行っている。しかし、こうした「花形」研究員の 補助 を行う人材については、地元への愛着が強く、転職志向が低いプログラムの卒業生は、きわめて魅力的なのである。

ノースカロライナ州政府が、130 億円の初期投資を行って始めた一連のプログラムは、地元に高い経済効果をももたらしている。人材を安定して確保できることに魅力を感じた多くの企業が、拠点をここに移し始めたことで、この 3 年間で新たに 1 万人の雇用が生まれ、税収入も 1200 億円増えた。ノースカロライナ州のサクセス・ストーリーは全米に知れ渡り、各所からの視察も相次いでいるという。
前出の政府の担当者、ノーマン・スミットさんは、胸を張ってこう語る。
「私たちは、教育と企業をうまく融合させることで、ワーキングプアの人たちを支援するだけでなく、ノースカロライナを、バイオ産業に魅力的な場所にすることにも成功しているのです」

ノースカロライナ州での滞在が終わりにさしかかった、ある日。2 年前からプログラムに通っていたクリスティン・プルエットさんのもとに、嬉しい知らせが届いた。地元の、遺伝子を研究する機関への就職が決まったのだ。
「とってもワクワクしています。新しい仕事は、きっと刺激的で面白いと思います。何よりも、これからはもっと長い時間子ども達と一緒にいられます。宿題を手伝ってあげられるし、遠くに遊びに連れて行ってあげることもできるようになる……今から、本当に楽しみです」
研究機関から採用の連絡をもらったクリスティンさんは、満面の笑みでこう話してくれた。

ワーキングプアの人たちを、地域の産業を担う人材に育て上げようという、ノースカロライナ州政府の取り組みは、「努力した人が報われる」アメリカを、再び取り戻そうとしているように見えた。

Arranged by 岩崎竜空（ER2179）